

<「知るっば!久留米」 令和2年12月10日(木) 12:30~放送分>

有馬火消し ～第1回～ 「江戸時代の火災事情」

<ゲスト：久留米市役所市民文化部文化財保護課 小澤 太郎主査>

坂本 MC (以下「坂本」)

「知るっば!久留米」ナビゲーターの坂本豊信です。

12月第2週目となりました。今週から『有馬火消し』をテーマにお送りしていきます。

ゲストは、この方です。

ゲスト:小澤太郎さん(以下「小澤」)

久留米市役所文化財保護課の小澤太郎です!

よろしくお願いします。

4月の『ドイツさん』以来の出演ということで、「聞きましたよ!」って色々な方から声をかけられているので、今日は緊張しています。

坂本 もうすっかり有名人じゃないですか?

小澤 いえいえ、何をおっしゃいますか。(笑)

坂本 4月のドイツさん以来、またまた小澤太郎さんのご出演ということで、今日のテーマはちょっと系統というか毛色が変わりまして、『江戸時代の火災事情』です。今とは違うんだろうなとは思いますが、まずは今回のテーマになっております有馬火消しが組織された当時の状況についてお話を伺いたいと思います。

小澤 「火事と喧嘩は江戸の華」なんていう言葉があるくらいですから、それだけ江戸では頻繁に火災が起きていたということなんですよ。

坂本 火災が多かったというのは、江戸のまちだけのことなのでしょうか?

小澤 いえいえ、当時は全国の城下町で同じように火災が頻発していたんですよ。

坂本 なるほどですね。久留米藩の城下町でも、やっぱり火災が多かったのですか?

小澤 そうなんです。怖いものの例えとして、「地震・雷・火事・親父(おやじ)」って言葉がありますよね?ただ、親父については、最近怖くないって言われますが。

坂本 私は全然怖くないですよ。

小澤 坂本さんは、優しい親父なんですね。私もですよ。(笑)

親父の代わりに風水害をいれると、ちょうど自然災害の種類が揃うんです。

以前、私が久留米の城下町で発生した様々な災害の中から、具体的な被害状況がわかるもの80例について調べたことがあるんですけど、そのうち半分以上が火災だったんです。

坂本 やっぱ、火災が多いんですね。

テレビの時代劇を見ていても、江戸のまちというのは木造の建物がほとんどですよ。

室内は障子とかふすまとか、極端な話、木と紙でできている建物というイメージですよ。

そうなると、一旦火が付いたら大変じゃないかなと思うんですけどね。

小澤 おっしゃるとおり。燃える素材でできているので、町の一軒から出火すると風にあおられて、一気に燃え広がるんです。

坂本 そうなんですね。久留米でも、大火があったという風に伝わっているんですけども、その時はどのように燃え広がっていったのでしょうか？

小澤 例えば、江戸時代も終わりに近い文政11(1828)年9月17日のことですが、十軒屋敷というところから出火しました。ちょうど久留米シティプラザの目の前、久留米郵便局あたりです。

坂本 この放送はシティプラザのスタジオからお届けしておりますが、目と鼻の先に郵便局があるんですよ。そこから出火したんですね。

小澤 強烈な南風にあおられて、あっという間に櫛原や北野町まで燃え広がったという事例があります。

坂本 9月に強い南風で一気に北へ燃え広がったということは、もしかして台風ですか？

小澤 そのとおりです。

実はこの台風、日本で初めて近代的な気象観測がされた台風なのです。

そして、有名な「シーボルト事件」の引き金となった台風なので、「シーボルト台風」とも呼ばれています。

当時、長崎の出島にいたお医者さんのシーボルトが、日本から帰国しようとした時に台風に遭遇してしまい、先発した船が難破してしまったんです。

その船の積み荷にご禁制の地図などがあったことがバレて、シーボルトは国外追放になってしまったんですよ。

坂本 いわゆるスパイ容疑ということですよ。

この時期に吹いた台風ということで、「シーボルト台風」の名がついたということですね。

かなり強い台風だったんですか？

小澤 この時、シーボルトが初めて台風を気象観測しているんですよ。
その記録によると、中心の気圧が930hPaなので、猛烈な台風ですよ。
その台風が、九州の西側から北上して長崎に上陸したので、北部九州にとっては、最悪の西寄りコースなんですよ。
この暴風の中、たまたま運悪く久留米の城下町で火災が発生してしまったんですよ。
江戸時代の城下町なので、ひとたまりもないですよ。

坂本 台風の風にどんどんあおられて、燃え広がったということですね。
そのほかに城下町での火災の特徴というのは、どんなものがありますか？

小澤 その他には、やっぱり「春一番」などの季節風ですね。
城下町というのは、久留米城下町、明治通り、通町などは東西に通りが伸びていますよね。
この通りに炎が移ると、一気に延焼してしまいます。

坂本 昔は通りが狭かったんですかね？

小澤 そうなんです。今よりもずっと狭かったんですよ。

坂本 今は広いですけどね。

小澤 防火対策もあってどんどん広げていきましたし、交通も便利になりました。
でも、昔はずっと狭かったんですよ。
私が横に寝たぐらいの1.8m幅から3.3m幅ぐらいしかなかったんです。
今のように歩道なんてありませんので、炎が一気に走り抜けて、そして燃え広がってしまうんです。

坂本 いわゆるウナギの寝床状態に建物が密集していたんですね。

小澤 そこが炎の通り道になってしまうということです。

坂本 一応、防火対策みたいなものはあったんでしょうけどね。

小澤 当時は、火災が頻発していますからね。
久留米藩としても、なんとか延焼を防ぐための工夫を色々やっていたんですよ。
ただ、それでも今みたいに消防車とか無いですから、仕方がないところもあるんです。
侍屋敷とか町屋の一部を移転して、空間を広げることで延焼しにくくしていました。
「通り」も、さっき狭いから炎が通ってしまうという話だったんですけど、ここを広げて炎が通りにくくするとか、通る時間を遅らせるなどの工夫もしています。

そもそも、お城が燃えたら元も子もないですよ。

お城の入り口には水桶をたくさん積み重ねて、初期消火に使いました。

ただし、火が燃え移ってしまうとなかなか水桶ぐらいじゃ手に負えない。まさに焼け石に水ですね。

当時、火消したちがどうしていたかという、一旦火事になったら炎の通り道を予測して、建物を引き壊すしかないんですよ。

水をかけても「焼け石に水」という話なんです、延焼を最小限にするしか方法がなかったんです。

坂本 残念ながら、被害を最小限に食い止めるには、建物を壊すしかなかったということですね。

隣を壊すとその先に燃え広がらないから、そこで火が止まるじゃないかという考えで、有無を言わず壊すわけですね。

小澤 一応、家主の承諾はもらってはいたようですね。

坂本 でも、緊急事態なのでしょうがないですよ。

火災の後には普請があって、大工さんが来て新しい家を作っていくという話ですね。

小澤 木造の建物なので比較的容易に復旧できるんです。

そうやって経済が回っていたんですね。

坂本 現在は、いかに火を消すかというのが消火なんでしょうけど、昔はいかに延焼を遅らせるかが目的だったということで、今とはずいぶん消防活動に違いがあるということがよくわかりました。

文化財保護課の小澤太郎さん、興味深いお話をありがとうございました。

次回は、『有馬火消しの始まり』をテーマに、別の方にお話をお伺いします。

お楽しみに。